ブータンの民俗音楽覚書
―宮廷奉公人から音楽家となったアプ・デンゴ氏のライフストーリー―

Notes on Bhutanese Folk Music：
Life story of Mr. Ap Dengo who became a musician from a court servant

伊野義博, 黒田清子*, 権藤敦子**, ツェワン・タシ***, ペマ・ウォンチュク****
INO Yoshihiro, KURODA Kiyoko, GONDO Atsuko, Tshewang Tashi, Pema Wangchuk

In this paper, the authors, from an interview with Ap Dengo, describe not only his life history, including his musical activities, but also the situation of the rapidly modernizing Bhutanese culture. We consider the background of Ap Dengo becoming a famous musician in Bhutan.

Ap Dengo, 82, was born in 1937 in the village of Tshangkha, Trongsa Dzongkahag, in central Bhutan. In his childhood, he lived with his uncle and aunt, grazing sheep and cows, much like the typical Bhutanese life. He was playing *tsangmo* (playful singing dialogue) while grazing sheep and cows. It was the beginning of Ap Dengo's musical activities.

When he was eight, he went to Drakteng and worked with his uncle who served the 2nd king. He was singing and dancing in social life such as gatherings of villagers and archery competitions. At the same time, it was an era of ambitious "learning" for him, learning how to read and write Dzongkha from his uncle's secretary, making bamboo flutes (*lim, jalie*) himself, practicing *dramnyan* himself. His boyhood learning of folk songs and dances, making and playing musical instruments greatly influenced his adolescence. Also, the ability to read and write the Dzongkha led him to later compose songs and publish songbooks.

At the age of 15, he became a Chang Gab (Prince's servant and bodyguard) of Prince Namgyel Wangchuck on the order of his 2nd king. He often danced to the king's family. At the idea of the prince, Ap Dengo, along with Princess Ashi Choki, learned to read and write the Buddhist language Chokey from Lamaist priest Gyelwa Nima in Bumthang. During his adolescence, his close relationship with the King's family and his talent for dancing and singing created Ap Dengo's cultivated future musicianship.

After that, he worked as Dhung yue (clerk) in courts and in the army. Around that time, he performed songs and dances when he was called by Prince Namgyel Wangchuck or at a party to celebrate someone's promotion. Through performing songs and dances, Ap Dengo was recognized as a skilled musician.

From the age of 42, Ap Dengo was a Ministry of Education prosecutor, where he was not only responsible for building schools and checking Dzongkha teaching, but also for teaching songs such as *boedra* and *zhungdra* and

---

2020.6.22　受理
*　金城学院大学非常勤講師
**　広島大学教育学研究科
***　パロ教育大学
****　フリーランス　ツアーガイド

teaching *driglam namzha* (cultured behavior and code of etiquette). In addition, at the Khaling Blind School, he learned about 'do,re,mi' Solmization and also taught using 'do,re,mi' . Becoming an educator led to his songwriting and musician activities. His publication "Folk Song of Bhutan" was distributed to schools across the country and he was recognized as a professional musician.

In 2006, when Ap Dengo was 69, he started the private music and dance group *Phunsum Drayang*. Behind the start of the group were the inheritance of traditional culture, the education of young people, and the desire to please foreign tourists. After that, his group became internationally active in Taiwan, Washington, Japan, Bangladesh, India, etc., and Ap Dengo became one of the famous musician in Bhutan.

1　はじめに

「近代ブータンの父」として知られる3代国王ジグミ・ドルジ・ウォンチュク（Jigme Dorji Wangchuck 1929-72，在位1952-72）は，たいへんな音楽愛好家であったようである。チベットから亡命後，国王の音楽家になったツェッテン・ドルジTsheten Dorji氏から伺った「国王は音楽好きで，いつも『踊ってください』『歌ってください』と言われ，大変だった」という話を以前報告した（伊野ほか2018）。今回は，宮廷奉公人から後にブータンを代表する音楽家となったアプ・デンゴAp Dengo氏の語りから，彼の音楽歴だけでなく急激に近代化してきたブータン文化の状況を描き，音楽家アプ・デンゴ誕生の背景について考察する。

アプ・デンゴ氏（幼名リンチェン・カンドRinchen Khando，後にソナム・デンゴSonam Dengoとして知られる）はトンサ県ツァンカ村Trongsa Tshangkhaに生まれ，7歳まで過ごし（聞き取りでは8歳），現在はパロに家を構えている。2代国王王子ナムゲル・ウォンチュクのboegarp（宮廷奉公人）の役職を務めた後，パロ高等裁判所，軍隊，教育省などで多くの役職を務めた。教育省から引退した後，彼はブータン南部のセメント工場で働き，ティンプーのリンチェンRinchen高校で音楽とディグラム・ナムジャ（*driglam namzha*伝統規律）のインストラクターを務めた。音楽活動では，1995年にDasho Kado, Lopen Tshendruと共にプライベートの文化グループDoegar Punsumを立ち上げ，活動した。2006年パロで，民俗舞踊と仮面舞踊などの伝統文化を若者に伝承することを目的としたプライベートの音楽舞踊団プンツォ・ダヤンPhunsum Drayangを創立した。プンツォ・ダヤンは，国内での公演だけでなく，日本，台湾，バングラデシュなど国外での文化交流プログラムにも参加している。重要な活動として，2005年アプ・デンゴ氏は，自身の調査に基づいて136の歌（ヴェードラ*boedra*，ジュンドラ*zhungdra*，ドゥクドラ*drukdra*）の歌詞集『ブータンの民俗歌Bhutanese Folk Songs』の出版がある。この著作は伝統的なブータンの歌に関する数少ない出版物であり，学校等で配布された。（Herman and Dorji 2010:33）。

また，アプ・デンゴ氏は，卓越した射手であり，ブータンのアーチェリー・トーナメントのルールをはじめてつくった伝説的な人物である。

アプ・デンゴ氏との関わりであるが，もともとは，筆者の一人である伊野が音楽教育と民俗音楽研究の関係から2002年3月にパロ教育大学PCE（Paro College of Education）の前身である国立教員研修所NIE（National Institute of Education）講師ツェワン・タシTshewang Tashi氏との交流を開始したことによる。ブータンの民俗音楽演奏家であるこのツェワン氏が，アプ・デンゴ氏の息子であった。彼との交流やその後のブータンでの民俗音楽調査を通して，アプ・デンゴ氏が3代国王と深く関わるとともに，音楽舞踊グループ・プンツォ・ダヤンの創立に見られるように，近代ブータンの教育活動や音楽活動を考える上で重要な人物であることを知り，その詳細について記録を残しておくことの必要性を感じた。

デンゴ氏に初めて面会したのは，2009年，彼がプンツォ・ダヤンを率いて日本公演を行った時の大阪の地である（プンツォ・ダヤンは2009年3月14日「第27回ミュージアム・セミナー『ブータンの仮面劇』」於：大阪音楽大学音楽メディアセンター楽器資料館，同年3月15日「アイフォニック地球音楽シリーズ第140回『歌い，踊る パロ谷の春』」於：伊丹アイフォニックホールで公演している）。その後，2010年には，パロ・ツェンドナChendona村の自宅を会場に民俗音楽ツァンモ*tsangmo*の取材を行った。ただ，この時デンゴ氏は海外公演で不在であった。インタビューの実現は，2011年プンツォ・ダヤンを訪問し，いくつかの歌や踊り，仮面舞踊を観劇した時である。公演前のわずかな時間であったが，貴重な内容を記録することができた。同時に十分な時間をかけての聞き取り調査の必要性を感じた。2013年には，デンゴ氏の生まれ故郷であるト

写真1　デンゴ氏宅（伊野2019）

写真2　デンゴ氏宅（伊野2019）

写真3　ダムニャンを弾くアプ・デンゴ氏（伊野2019）

写真4　語るアプ・デンゴ氏と聞き手の一人ペマ・ウォンチュク（伊野2019）

ンサ県ツァンカ村の生家を訪問した。こうした経緯を経て2019年9月，ようやくデンゴ氏の自宅で再度のインタビュー調査が実現した。

2　デンゴ氏の語り

インタビューは2019年9月24日パロ・ランゴ地域チェンドナ村(Paro, Lango, Chendona)にあるデンゴ氏宅でおこなった。聞き手は，ペマ・ウォンチュク， 伊野義博，権藤敦子，黒田清子，ツェワン・タシである。最近デンゴ氏は自身のバイオグラフィーを執筆され，英訳されたものを我々に提供してくださった。近々ツェワン氏が編集したものが出版されるという。また，これまで受賞したさまざまな賞状を見せていただいた。その内容は，バングラデシュ国立音楽院からの音楽公演に対する賞状，以前勤めていたセメント工場からのディグラム・ナムジャ社員教育に対する感謝状，リンチェン高校からの3年間にわたるディグラム・ナムジャ教育に対する感謝状，応急処置研修修了証，ディグラム・ナムジャの指導者指導の賞状，教育省ゾンカ語視学官としてのトレーニングに対する感謝状，アーチェリーやボランティア活動に対する賞状や感謝状である。また，56歳で公務員を辞めたときに4代国王から頂いた一年間の勤務継続を求める手紙も見せていただいた。現在は65歳定年だが，以前は56歳定年であった。ブータンでは国王から手紙を頂くのは特別なことだという。

2.1　子どもの頃ツァンカ村での放牧生活における歌と踊り

伊野：我々は音楽の研究と音楽教育の研究をしています。今日は，デンゴ氏が生まれてから今まで，特に音楽に関して詳しくお話を聞かせていただき，それをまとめ広く紹介したいと思います（録音・撮影記録，成果公表の許諾)。小さな頃から思い出していただいて，王様との関係や今までの音楽活動などを時代を追って詳しく話していただきたいと思います。

アプ・デンゴ（以下D)：だいたいはバイオグラフィーに書いてあります。8歳まではトンサのツァンカにいました。6歳から8歳までは羊飼い牛飼いをおじさんとやっていました。

伊野：何年の何月何日生まれ，何歳ですか。

D：現在82歳です（1937年生まれ)。

ペマ・ウォンチュク：誕生日は1月1日（ブータンでは誕生日を重視しないため，多くの人は1月1日が誕生日である)。

写真5・6　トンサ県ツァンカ村（黒田2013)

伊野：8歳までのツァンカ村での一日の生活を教えて下さい。

D：(ツァンカ村のPemaおじさんとDorji Wangmoおばさんのもとでの8歳までのくらし）朝だいたい日が出てきたら起きて，夏なら5時ぐらい，冬なら6時すぎぐらいに起きて，顔を洗って家の仕事を手伝ったりして，それから食事をします。朝食後8時くらいに羊と一緒にお弁当を持って家を出て，だいたい夕方5時くらいに帰ってきます。そこでも友だちの羊飼いがたくさんいるので山に羊を連れて行って草を食べさせていまし

た。
伊野：山に羊を連れて行ったときにツァンモ（掛け合いのあそび歌）をしたと聞きましたが。
D：そこで羊を放し飼いにしてみんなで一緒にツァンモをしたり歌ったり遊んだりしました。
伊野：皆子どもたちだったのですか。
D：ほとんど子どもが多かったです。たまに子どもがいない人は大人がいくことになります。
伊野：羊は一回で何頭くらい連れて行きますか。
D：1回に60 ～ 70頭くらい，そこの村の人たちは少なくとも40頭くらいは連れて行きます。
伊野：羊のほかにも
D：牛も飼っていました。
伊野：兄弟は何人ですか。
D：兄弟は，全部で４人，男二人女二人の一番上です。５人（兄，デンゴ，妹，弟，妹）いましたが一番上の兄がすぐに亡くなりました。下の妹二人，弟一人です。一番若い妹はティンプーで軍隊の一番偉い人と結婚してそこにいます。弟はトンサの南にいます。もう一人の妹は昨年亡くなりました（図１）。

2.2　ペンジョールおじさんについていったヅァクテンでの少年期

D：８歳の時（1945年），おじさんのペンジョールPenjorが2代国王ジグミ・ワンチュク（Jigme Wangchuck 1905-1952在位1926-52）のところで働いていましたが，2代国王が彼をヅァクテン・ドンパDrakteng Dungpaという県知事のような役に任命しました。そこでトンサから南のほうで働かなくてはならなくなりました。場所の名前は，ヅァクテンDrakteng。そこに２代国王の土地があり，それを管理しなくてはなりません。そこで米を収穫して国王とかに送るという仕事です。8歳の時にペンジョールおじさんについて行き15歳までそこにいました。（補足：ヅァクテンはツァンカの南に位置するトンサ県の地区である。1929年2代国王はこの地に姉王妃プンツォ・チョデンPhuntsho Chodenのためにクェンガ・ラプテン御殿Kuenga Rabten Palaceを建て，冬期はここで過ごした。すぐ近くのサムドゥプ・チョリン御殿Samdrupcholingは，妹王妃ペマ・デチェンPema Dechenのために1940年代に改装された。彼らの娘たちは，1970年代頃までこの御殿に住んでいたと考えられている）。

写真7（左）1927年2代国王ジグミ・ワンチュク戴冠式プナカゾン中庭で儀式用護衛を伴う（Rabsell Media Services2008:29）
写真8（右）1928年戴冠式1年後デワンギリで儀式用ダンサーとボディーガードが後ろに立っている（Rabsell Media Services2008:32）

伊野：答えにくかったらいいのですが，どうしておじさんのところについて行ったのですか。
D：みんな一緒に住んでいましたから。
伊野：15歳までで，ツァンモとか歌で遊んだりされたんですか。
D：ついていってからはおじさんが国王の土地を管理していました。田植えのころ，稲刈りの時などは村の

人たち皆が集まらなければなりません。その時に集まった人たちと一緒にツァンモをしたり踊ったり歌ったりして遊んでいました。昼間仕事をして，仕事が終わった夜に皆で集まってツァンモをしたり踊ったり歌ったりしていました。

伊野：ヅァクテンに移った時のくらしの様子を聞かせてください。

D：そこにいた時おじさんはとても忙しかった。私は，働いている人たちを見に行ったり，政府の仕事をしたり，ナクツァン（Naktshang政府高官の宿泊施設）の管理もしていました。一人コックさんもいて，倉庫から米や野菜を出してコックさんに届けたりする役目もしていました。ヅァクテンにいた時，おじさんの秘書のGomchen Langyaさんからゾンカ語を教えてもらいました。それで自分は字が書けるようになりました。

伊野：15歳までにどんな音楽の経験をしてきましたか。

D：そのときに歌を歌ったりもしたけど，ダムニェン（*dramnyan* 撥弦楽器）の練習もしました。

伊野：誰から習ったのですか。

D：自分で練習をしました。完璧ではないけど少しずつ出来るようになりました。（それ以前の）羊飼いの時にもリム（*lim*，息子ツェワン氏によるとおそらく*dong lim*縦笛）をつくったりジャリ（*jalie*，短い縦笛）を竹でつくったり，それは小さい頃からしていました。

伊野：リムやジャリはどうやって作りますか。

D：ジャリ（本当は長いが，練習用は竹で短いもの）を作るのは簡単で誰でもできます。お祈りとかする時に使うものではなく練習用です。そこでブータンの歌を歌ったりジャリを吹いたりしました。リムをつくるのはちょっと難しいけれどその場にある竹でつくっていました。リムは大人たちがつくってくれました。（補足：お祈りの練習について。ブータンの僧侶は儀式用金管楽器ドゥン*dung chen*の練習に竹笛ジャリを使用するので，それを真似ていたと思われる。）

写真9　1958年「ブータン唯一の在来楽器。昼休みには竹笛つくりに余念がない」（中尾2011:267）

伊野：自分でもあとで作れるようになったんですか。

D：小さい時はできなかったけれど，大人になってできるようになりました。

伊野：今は楽器の話でしたが，15歳前，歌や踊りはどのようにしてできるようになったのですか。

D：何かお祝いの時などでシャプタ（*zhabdro*民俗歌と踊り）など一緒に踊って覚えました。自分は興味があるので覚えました。

D：子どもの頃からアーチェリーもやりました。別にトレーニングしたり教えてくれる人はいなかったです。

伊野：アーチェリー大会も15歳前からしていたのですか。

D：15歳までいたヅァクテンでは，国王献上米など

写真左10（左）1958年「弓の試合」（中尾2011: xiv）
写真右11（右）1958年「女子応援団の歌と踊り」（中尾2011: xv）

を作るグループと一つ向こうの村との闘いを楽しんでいました。アーチェリーはチョダ（*chodha*チーム対抗戦）という戦いがトンサにあるけど，ペレラ峠のこっち（西側）のシムタンのほうが村と村の大会が多かったです。

2.3　ナムゲル・ウォンチュク王子の宮廷奉公人となった青年期

伊野：そこで15歳まで。15歳になったら新しい次の展開になったのですか。

Ｄ：（自分の）父Rigzinはずっと2代国王のところでGup（ボディガード）として働いていました。昔，国王のところで働いていた人は国王から刀などいろんなものがもらえました。父が亡くなったのでそれら（ゴ*gho*男性民族衣装やカムニ*kabney*正装肩掛け）を返却するか，息子が（父の）跡継ぎとして入るかしなくてはなりません。その後2代国王から手紙が来て，「今の国王のおじさんのところに一人働いてくれる人が欲しいので，亡くなった父の息子デンゴがいってください」という手紙がきた。（バイオグラフィーに「2代国王の承認を受け妹王妃ペマ・ディチェンよりナムゲル・ウォンチュク王子のチャンガプChang Gabを命じられる」とある）

伊野：15歳の時（1952年）のナムゲル・ウォンチュク王子（2代国王と妹王妃の長男Gelsey Namgyel Wangchuck1943-）に仕えていたときのことを話して下さい

Ｄ：2代国王の息子ナムゲル・ウォンチュク王子は，夏はインドのカリンポンへ留学しました。私は，冬にトンサに戻ってきたときのペー Boe Chang Gab（私的ボディガード，ほぼペーに同じ）という召使いというか世話係になりました。その時に（デンゴは）アーチェリーもできるし，歌も歌えたため，一度もう一人王女のスタッフと共に王宮に呼ばれました。その時に国王の家族が皆いました。中に入る前にナムゲル・ウォンチュク王子が出てきて「デンゴは来ていますか」と言われ「デンゴは私です」と言うと「あ，良かった」と言って中に入っていきました。その後また戻ってきて「来てください」と言われ，行ったら国王家族皆が待っていて，すぐに「踊りなさい」とのことでした。３回踊りました。次に一人王女のスタッフが呼ばれて３回踊りなさいと言われ，三つの踊りを歌って踊りました。その後王様家族は食事の時間となりました。食後にまた呼ばれて今後は二人一緒に踊って下さいと言われました。そこで二人のスタッフが国王家族の前で踊りました。

　冬の間，ナムゲル・ウォンチュク王子はまたインドに留学しました。冬は皆他の仕事がないので，デンゴや他のスタッフたちはツアーのようにしてブムタン（Bumthangトンサ東北に位置する古寺や聖地の多い歴史深い地）に行きました。その時に（チベットから亡命してきた）僧ゲルワ・ニマGyelwa Nimaがルンツェのクルトェ（Lhuentseブムタン東北に位置する。その北部クルトェ Kurtoeはチベット国境地帯）にきていました。以前ナムゲル・ウォンチュク王子が一度ルンツェで，そのお坊さんに会っていました。そのお坊さんはリクネ，ジュン（仏教語の文法？）とか仏教のことにとても詳しいので，王子はその人がそのままブータンにいてほしいと思っていました。デンゴとアシ・チュキ王女（Ashi Choki Wangmo1937生。ナムゲル・ウォンチュク王子の姉）たちがブムタンにいた時，ジャッカル（Jakar中心の町）の一つしかない無線電話に王子から電話がありました。そういう素晴らしいお坊さんがいるなら（チベットからブータンを通ってインドに行くより）ブータンにいた方がいいと王子から無線電話で言われ，アシ･チュキも「私もリクネやゾンカ，仏教語を勉強したい」とのことだったので，ルンツェの県知事みたいなえらい人に「あなたがその人に言ってそのお坊さんをブムタンにおくりなさい」とゲルワ・ニワを引き留めました。こうしてデンゴともう一人のスタッフBongop Namgayとアシ・チュキの3人は，ブムタンで字の読み書き（綴り）をチェキ（Chokey仏教語）で勉強した最初の３人となりました。

伊野：何をならいましたか。

Ｄ：読み方と綴りをChokeyで教わりました。ゾンカ語では教わりません。教科書ラクテンで綴り方を2年間習いました。1960年（23歳）にパロにきたから。

伊野：勉強は，王子の命令だったのですか。

Ｄ：ナムゲル・ウォンチュク王子からの命令で「私は留学に行くので，デンゴは食事とか全部アシ・チュキに出してね，それから勉強もしてほしい」と言われました。その時にアシ・チュキの宮殿がブムタンにあって，そこで一緒に勉強しました。（補足：1937年，２代国王は，アシ・チュキ王女Ashi Choki Wangchuck誕

生後に，ブムタンのドムカル・タシチョリン御殿Domkhar Tashicholingに妹王妃ペマ・デチェンが夏に過ごす別宅を建てた。妹王妃は1943年にナムゲル・ウォンチュク王子，1944年にデキ・ヤンゾム王女Ashi Deki Yangzom Wangchuck，1949年にペマ・チョドロン王女Ashi Pema Chodron Wangchuckを出産した。アシ・チュキ王女は，ウォンデュチョリン御殿Wangdecholingのバブ・チョギャルBabu Chogyalでゾンカ語と英語を学び，ラマ・ゲルワ・ニマLama Gyalwa Nimaは彼女に宗教的な教えを与えた。 ナムゲル・ウォンチュク王子はウォンデュチョリングで教育を受けた後，ダージリンのノースポイントNorth Pointで勉強した。彼はパロ・ペンロップParo Penlop，通商産業大臣，内務大臣，社会福祉省の代表を務めた。デキ・ヤンゾム王女とペマ・チョドロン王女は，ダージリンのセントジョセフSaint Josephで教育を受けた（Lham1998:33-34）。）

写真12（左）2代国王ジグミ・ワンチュク(Rabsell Media Services2008:26)
写真13（右）1949年クンガラプデン宮殿で左から男装したアシ・チュキ王女，2代国王，ナムゲル・ウェンチュク王子，ベティ・シェリフ，姉王妃プンツォ・チョデン，妹王妃ペマ・ディチェン(Rabsell Media Services2008:42)

写真14（左）3代国王ジグミ・ドルジ・ワンチュク(Rabsell Media Services2008:44)
写真15（右）左から姉王妃プンツォ・チョデン，3代国王，ナムゲル・ワンチュク王子，妹王妃ペマ・ディチェン，前アシ・チェキ王女(Rabsell Media Services2008:49)

2.4　ナムゲル・ウォンチュク王子に伴いパロ高等裁判所，軍隊で事務官となる

D：1960年３代国王（ジグミ・ドルジ・ワンチュクJigme Dorji Wangchuck1929-1972年在位1952-72年）か

らの命令で，留学を終えた異母弟ナムゲル・ウォンチュク王子がパロで初めて裁判官（Thrimpon）になり，デンゴもパロに来てその下で働きました。それまでは働いていたけど食事だけで給料はありませんでしたが，裁判官（となったナムゲル・ウォンチュク）は800ヌルタム，デンゴたちは45ヌルタムもらえるようになりました。

最初はそこで，ナムゲル・ウォンチュク王子の世話をしていましたが，トゥンイー Dhung Yue（事務助手）という事務官が少なくて困っていてその仕事をしなさいと言われ，昼間は事務官として働き，夜はナムゲル・ウォンチュク王子の世話をしていました。その時給料は50ヌルタムになりました。その時の仕事は，山に住んでいるヤク飼いの人たちと物々交換をするためにパロから山にお米を持っていく人たちの記録係です。何キロ持っていくかをゾン（Dzong城塞，仏教施設兼行政機関）に届けなくてはなりません。唐辛子を（例えば50キロ）どれくらい持っていくかなど，ゾンで全部書かなければなりません。それを全部デンゴが一人ずつ記録し，レシートを渡していました。レシートは山に行く途中にある軍のところで見せることになっています。それを見せないと持っていってはいけない。そのレシートを書いていました。（この貿易は）お金とか税金とかは払わなくていいけど，どれぐらい山にもっていくかを全部記録する仕事をしていました。

写真16　1958年トレモ・ラ「ブータン人はキャラバンを組んで，米を運びチベットへ交易に行く」（中尾2011:96）

（1958年にブータン調査をした中尾佐助もトレモ・ラ周辺に相当な交易交通量がみられることを描写している「トレモ・ラ」『秘境ブータン』2011:93-99）

伊野：パロ・ゾンで仕事していたのですね，軍にもっていくレシートを書く。

D：（レシートを書かせる）心配は，チベットへ物資をもっていかないかということだったと思います。（米の他にも）村の人が家を作る時どのくらい木を切っていいか，そういった書類も全部書きました。もう一人の友だちでトゥンイーの人がいて，その人は裁判の書記の仕事（裁判所に来た人の誰が正しいとか）をしていました。その人は字が書けるが綴りを間違えるのでその人の手伝いもしていました。

伊野：その頃，音楽はお休みですね。

D：ツァンモはやらなかったが裁判官をしていたナムゲル・ウォンチュク王子の時間がある時に，「トゥンイー来て下さい，踊ってください，ダムニェン弾いて歌って下さい」と呼び出されて何回もいきました。その頃から少しずつお給料があがりました。先輩が70ヌルタムなら私は50ヌルタム，先輩が100ヌルタムだったら私は70ヌルタムといったように。その後，1964年3代国王の命令でナムゲル・ウォンチュク王子がパロ・ペンロップ（Penlop知事）になりました。その後すぐ軍隊の副代表にもなりました。パロで働いていた私は，新しくきた裁判官に「ナムゲル・ウォンチュクが軍の副代表になったので自分もそこについていって働きたい」と手紙を書きました。そして，パロの仕事をやめてティンプーの（Royal Bhutan Army(RBA)のある）ルンテンプー Lungtenphu にいって同じトゥンイーの仕事をしました。お給料は150ヌルタムになりました。ルンテンプーでは，事務官は軍人にならなくていいのでゴを着ている人もいましたが，私は軍服を着て朝は事務の仕事をし，午後2時からは軍隊のトレーニングをしました。その時に軍の事務官はコックを一人30ヌルタムで雇うことができたが，自分は雇わなくてもよかったので雇わず，その人の分も入れて給料は180ヌルタムでした。

権藤：軍隊の音楽ってないんですか。軍隊の人は音楽しない？

伊野：さっきナムゲル王子に呼ばれて音楽した話がありましたが，軍隊の時にも呼ばれて音楽をしたりダムニェンを弾いたりしたことがあったのですか。

D：軍の時も昇進祝いの時などに私たちが行って踊ったりダムニェンで弾いたりしていました。

権藤：軍隊に音楽をする団体はないのですか？

D：ナムゲル・ウォンチュク王子のところで13年ぐらい働いて，それから軍隊では13年ぐらい，26年間働いて年金をもらって軍隊を出てきました。
伊野：前の王様家族とか軍隊の時にたまにお祝いのときに踊ったり，ダムニェンを弾いたりしたとのことでしたが，具体的にどんな曲を演奏したのですか。その時にすでに作曲をしていましたか。
D：その時は皆と一緒に踊ったりして，たまに偉い人の前でヴェードラ（*boedra* チベットの影響をうけた民俗歌）やジュンドラ（*zhungdra* ゆっくりシラビックに歌われる民俗歌）を歌ったりしました。歌はつくってはいませんでした。軍隊をやめてからです。
ペマ：ここ（バイオグラフィー）に書いていないことを話してもらいましょう。
伊野：例えば，軍隊の時にお祝い事があった時，どういう流れでやるのですか。
D：最初は，お茶をだして，スジャ（*suja* 紅茶）やデシ（*desi* 黄色い米），お酒やジュースなどを飲みます。その後に踊ります。最初はジュンパ・レクソ（*jyenpa leksho* ウェルカムダンス），最後がタシ・レベ（*tashi laybay* エンディングソング）でその間は何でも好きなものを一日踊ります。（その日の流れとして）軍隊で昇進した人はその人にもよりますが，ダル（*dhar* スカーフ）をもらってお寺に行き，その人が帰ってきて始まるのが12時くらいになります。
伊野：そこから何時頃までやりますか。
D：大体17時頃まで。
権藤：家でやるのですか。
D：だいだいはそうした軍隊の会場があります。
伊野：デンゴさんは歌や踊りがうまいので特別によばれたのですか。
D：先ほど言い忘れました。そこで踊っている人は軍人たちとその奥さんたちが皆で一緒に踊ります。その時は今のプンツォ・ダヤンのようなグループはないので。フォークソングで軍人の奥さんと踊ります。皆が必ず呼びにくるので，その時は絶対いかないとだめです。
権藤：ずっとダムニャンを弾いて歌っているのですか。皆さんが踊って，デンゴさんは演奏している。
D：皆と一緒に踊ったり，たまにダムニェン持って偉い人の前で弾きながら歌ったりします。
ペマ:踊りの演奏とかではなくて，日本でも三味線をもって弾きながら歌ったりやったりするのと同じです。踊る時に楽器（演奏）はありません。

写真17（左）1952年3代国王結婚式パロ(Rabsell Media Services2008:58)
写真18（右）1958年ネルー訪問の時，人びとと踊る3代国王(Rabsell Media Services2008:58)

2.5　教育省での検視官としての活動

伊野：これ（バイオグラフィー）によると，あとチベットの関係があって，軍隊に入られて，その後2006年にとんでいますが，その間の話を聞かせてください。
ペマ：ここには全部書いてないですね。
D：その（軍の）後は教育省で働きました。偉い人にどこで働きたいかと聞かれ，教育省で働きたいと言いました。その人もアーチェリーとかすごく好きな人で。教育省でインスペクター・グレード2というポジション。その時は給料も550ヌルタムになりました。政府の学校をつくるときに見に行ったり，どうつくったら

いいかを指導したりする仕事をしていました。チュカ県のボンゴ（Chhukha, Bongoパロ南部の県インド国境地帯）という田舎で学校をつくりに，インスペクターとしていきました。そこに6カ月ぐらいいました。
伊野：それからだんだんとディグラム・ナムジャを教えるようになっていくのですか。
権藤：ゾンカのカリキュラムをつくったのですか。学校をつくったのもですが，ゾンカのカリキュラムもつくったのですか。ゾンカ・ランゲージ・カリキュラムの責任者と（バイオグラフィーに）書いてあります。
D：ゾンカ語の先生たちがどのように教えているのかをチェックしたりもしました。その後ルンツェの学校の修理にもいきました。
伊野：ずっと教育省，そのうちにディグラム・ナムジャの先生にもなるのですか。
D：インスペクターの仕事は，学校つくりだけではなくて，学校で歌を教えたり，ディグラム・ナムジャを教えたりするのも仕事でした。教育省では，学校に行って物資の調達や課題解決など，教育委員会のような仕事です。チュカでは3つ学校をつくりました。
権藤：歌はどんな歌を教えたのですか。
D：ヴェードラやジュンドラを教えました。ジュンドラの意味とかを教えました。ボードに歌詞を書いて，最初は自分が歌う。次にみんなで歌いましょうとかというように。子どもは（歌に）興味をもっているが一回では覚えられない。今ならレコードとか（複数再生）できるが，後で忘れることが多い。最初はボードに歌詞を書いて，私が歌いますからちゃんと聴いてください，そうやって繰り返して教えました。
伊野：その時にダムニェンで伴奏したのですか。
D：歌をそのまま教えました。ダムニャンは持っていくのが大変だから持って行ってないです。
伊野：歌詞をボードに書いて歌った。何度もやって。
D：その（教育省）後は，セメント工場。1995年で公務員の仕事をやめて1996年にセメント工場に就職しました。セメント工場で2番目のボスとして働きました。

2.6　カリン盲学校で出会った「ドレミファ」とブータンの歌

伊野：さっきの歌の授業の話ですが，カリン（Trashigang, Khaling東部タシガン県の多くの学校が集まる地区）のカリン盲学校（Khaling Blind School国立障害者施設・盲学校1973年開校）でも教えたのですか。
D：目が見えない人に歌を教えました。楽器も教えましたが私よりもっと出来る人がいました。そこでびっくりしたのは，目が見えない人が皆ドレミファで歌を習っていたことです。例えば「ゴーイーターシーヤサアーラー」は「レーミーラーソーミソラシラー…」というように。私が行くまでに皆ドレミファで習っていたから，ドレミファでは上手に歌えました。でもドレミファを使わないと歌えません。
伊野：どういうことですか。
D：（ハルモニウム（Harmoniumインドでみられる鍵盤楽器）を弾く素振り）
伊野：鍵盤を使っていたと言うことですか。
D：ピアノじゃなくて何か，ハルモニウムでやっていました。
ペマ：ブータンにはあまりないですね。そこではあった。
伊野：音楽の先生がすでにいたってことですか？授業があったってことですね，インドの人ですか。
D：もう一人ケサン・ドルジKezang Dorjiという目が見えない人がいて，その人が教えていました。学生さんで音楽のすべてができて，ダムニェンもハルモニウムもできました。とても頭がよい人でした。たとえば私が歌詞を作ってこれにメロディをつけてと頼むと次の日に作ってきてくれたほどです。
権藤：その人はドレミファをどこで習ったのですか。
D：先輩から習ってました。最初は誰から習ったかはわかりませんが，みんな知っていました。
伊野：デンゴさんがドレミファに出会った時とまどいましたか。やりづらかったですか。
D：最初私はドレミファがわかりませんでした。大人に教える時はそのまま（ドレミファ使わず）教えても歌えますが，子どもにはドレミファで教えるのが簡単ですし，それがないとメロディをすぐに歌えません。子どもにはドレミファを使った方がよいと思うようになりました。その後ケサン・ドルジからドレミファを習いました。ケサン・ドルジは少し目が見えていました。
伊野：子どもは楽器もしましたか。

D：（音楽の）時間は，35~45分くらい。その時にミュージックホールにいってハルモニウムを習う生徒，ダムニェンを習う生徒，リムの生徒はリムというふうに習いました。歌の時間もありました。
伊野：逆にデンゴさんがダムニェンをドレミで考えるようになりましたか？
D：ドレミファ使うのはヴェードラだったら6弦で良いけれど，ジュンドラは7弦使う必要があります。ティンティという弦を。
伊野：どうして7弦必要なのですか。
D：（ダムニェンを取り出して歌う）ドレミファにはティンティ Ting Ti（little sound）がありません。
ペマ：ドレミファの中ではいっていないのが，ティンティ。
伊野：（調弦は）レソラレではないのですか。ジュンドラをしようとするとドレミではできないのですね。
D：ティンティがないとジュンドラはできません。（ダムニャンの）詳しいことはツェワン・タシに聞いてください。
（ツェワン・タシ：できないことはないが，何か良くない。ティンティはモケ（Mo Key女の音）。ティンティがあるとポケ（Pho Key男の音）とモケが両方になる。1，3弦がモケ，あとはポケ。ダムニェンのベースはポケだが，全部ポケだったら音が良くない。ジュンドラの時は，いつも一緒に3，4，5弦を開放弦で弾く。ただし，4，5弦を押さえて旋律を弾くときは，ティンティは使わない。）

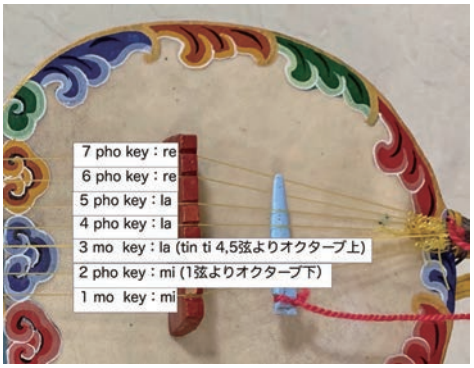


写真19 ダムニャンの調弦とポ・ケ，モ・ケ（伊野2019）

伊野：ジュンドラをしようとするとドレミファがうまくいかないのですね。
D：どんどん音が高くなるし，ティンティがないと。ヴェードラはできるが，ジュンドラはできません。
伊野：ブラインドスクールではヴェードラをやっていたんですね。
D：ほとんどそうです。（ヴェードラの）歌い方です。ジュンドラは長く伸ばさなきゃいけないので皆できません。
伊野：その時はジュンドラを歌う機会はなかったのですか。
D：ジュンドラという言葉はもともとありません。ダン・リムDong（Melody）Riem（Long）と言いました。1968年の時に3代国王がティンプーではじめて歌と踊りのグループ（Royal Academy of Performing Arts(RAPA)の前身）を作った時に，ダン・リムのことをジュンドラと決めました。そこに歌に詳しい人が集まって，ダン・リムをジュンドラ，ゴル・ゴムGor Gom（サークル）はヴェードラになりました。
（ツェワン・タシ：Boeはボディガード，彼らが常にヴェードラタイプの歌を歌った。彼らはとてもスマートで，ダンスが好き。ゴル・ゴムはダンシングスタイル。ジュンドラは列になって踊る。）
権藤：その時は，そのグループに入ってはなかったのですか。
D：2002年にセメント工場からティンプーのリンチェン高校の先生になりました。そこで知り合い（校長）が学生にディグラム・ナムジャを教える先生が必要ですといわれ教えました。3年1ヶ月いました。

2.7 教育省時代にはじめた「創作活動」

伊野：この本（バイオグラフィー）によると教育省の時に作曲を始めたそうですが。
D：教育省の時，あまりはっきり覚えていないがその時から作ったと思う。
伊野：いつ頃から歌をつくるようになりましたか。
D：今までディグラム・ナムジャの内容を子どもたちにわかりやすく伝えるためにつくったり，国王を褒め讃えるトゥパ（toepa），あるいは国の素晴らしさを讃えるための歌をつくったりました。いろんな機会でつくりました。素晴らしいジェケンポ Je Khenpo という偉いお坊さん（宗教面での最高位，大僧正），国王の奥様，国民のこと，ブータンの国のこととかについての歌をつくりました。
伊野：誰かに頼まれたりはしたのですか。
D：（歌集をみながら）オレ・ミチャ Oley Micha とか子どもたちのためにひとつ歌つくりました。たまに学生から歌をつくって欲しい，そういうお願いもありました。
伊野：歌の本を出版されていますね（『ブータンの民俗歌』2005年。136の歌詞のコレクション）。
D：そう。そこには自分の歌だけではなく，他の人の歌も入っています。タクパ・ケンチョスム *takpa khuencho* sum という仏様にお供えする歌。歌でお供えして，自分が長生き（ツェリム tsherim）出来るようによろしくお願いします。そういうお供えの歌もつくりました。もうひとつはメンジョ・ドゥックギ *menjong drukgi gelkhap*, 国の中で太陽が昇るようにブータンにもデキ（Deki 平和）がくるように。最後にディグラム・ナムジャのこともはいっています。もうひとつは自分と友だちでつくりました。ダショー・ドンチェン・サムゲドルジ Drungchen（秘書）Sangay Dorji。この人もたくさん歌をつくってます。
伊野：歌はどのようにしてつくりましたか。ダムニャンを使いますか。
D：ダムニャンは使いません。例えば山や木のことについてつくるのであったら，木の素晴らしさやそれに必要な水のこととか全部自分で考えて作ってます。
伊野：メロディーはどうやってつくりますか。
D：メロディーは，全く新しいメロディーを作ることができないので，前につくったメロディーを使ったり，３つぐらいの曲からメロディーつくったり，ヒンディの曲やネパールの曲を聴いたりして，そこから少しずつ曲をもらったりして作りました。Tashipai Lu Chi は1987年，Deki Phunsum は1991年，Gaki Nima は1991年，Palden Drukpa は1995年につくりました。本にあるのは全部がデンゴ作曲ではありません。自分の作曲は全部で10曲です。
伊野：（ソナム・ドルジの本を見せて）これで全部ですか。
Tashipai Lu Chi（ブムタンのクジェ・ラカン Kurji Lhakahng の精神的な重要性について）。Menjong Druki Gyalkhap Di（薬草の地としてのブータン，Yeshi Wangchuk との共作，ヴェードラからの編曲）。Takpa Kenchok Sumla（ヴェードラのメロディーからの編曲）。Gungtoe Yuel Lu Ga Ga（母なる大地についての「長いメロディー」dangroem sarp スタイルの歌）。Gadhen Druk Ki Gyalkahp（愛国歌）。Deki Phunsum Tshokpa, Palden Drukpa Choklay Namgyle, Gaki Nima Shar（平和と繁栄の地としてのブータンをテーマにした歌）（Herman and Dorji2010:33）
ペマ：（本をみながらデンゴ氏に読み上げる）10曲だけのようです。
黒田：Am Lhachem さん（ツァンカ村出身で３代国王の歌手となった人物）との接点は。
D：一緒に歌ったりしました。自分より年上なので，すごく専門的でなんでもできる人だった。
伊野：その人から教わったのですか。
D：しっかり覚えていないけど，一緒に歌ったりしました。だいたい若い時は一緒に３－４回踊ればできるようになります。お祝いの時とか。
権藤：チベットのお坊さんから（チェキを）教わった時，チベットの歌も習いましたか。
D：勉強だけで（歌を）教わったりしませんでした。ただ，歌が好きだとわかってお坊さんが一つ歌を作ってくれました。ヴェードラの曲を（思い出そうとしたが忘れてしまった）。昔は歌をつくるのはだいたい偉いお坊さんです。そういう人がつくった歌が多く，歌もほとんど国王のこと，山や自然についてのものです。
伊野：王様との関係を聞きたいのですが，歌や踊りが上手だったことで何回も誘われたとのこと。どのくらいありましたか。

D：３代国王が一回モンガル（Mongar 東部の県）に行きお帰りになった時に，そこで王宮でお姫様と一緒に話をしたり歌ったりする一人チベット人ペプ･ツェリラ Boep（チベットの）Theringla という人がいました。そのグループと一緒に私も入って国王の前で踊りました。
伊野：他の王族の前では，踊ったりしたのですか。
D：今だったら海外からお客様がたくさんきていますが，当時はそうではありません。国王や偉い人たちがちょっと暇な時にシャプタ Zhab Thra（ダンス）を踊ってくださいとか言われます。その時にそこのスタッフたち全員出てきて踊らなければなりません。そういうことがしょっちゅうありました。

2.8　アプ・デンゴ氏の『ツァンモ・ノート』

伊野：ツァンモで覚えているのがあったら歌ってください。
D：（ノートをみて３曲うたってくれる）自分でつくったツァンモもあります。（ツァンモ歌詞集を読む。他の人が作ったものが多いがデンゴ氏のものもある。）

【ツァンモ１】

Sha sho ri ye la tse ney	東の山の上から
Karsel dawa la shar jung	白いお月様が出てきます
Ma key ami la zhel rey	お母さんのお顔を
Ye la khor khor la jay jung	心に思い出します

ペマ：これはチェキではない（ゾンカ語なのでわかる）。

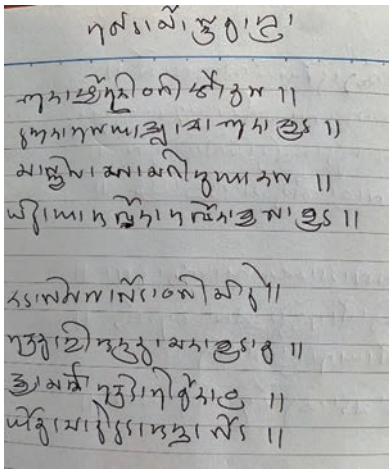


写真20　アプ・デンゴ氏のツァンモ・ノート（伊野 2019）

【ツァンモ２】（楽譜A）

Rang sem song woe la mi dey
Tam gi dhu marla jung na
Jamtsho ting gi norbu
Loen pa di dang dra song

ペマ:これはチェキで書かれており（普通のブータン人は）誰もわからない。これで遊んだのではないでしょう。書くためにつくったツァンモだと思う。

【ツァンモ３】

Mi chey pen pi seymo
Kham drey tshar la ten na
Khamdo thoen pi tse ney
Drey bu minpa dra ju

【ツァンモ４】（楽譜B）

Sem pa pharla shor ney
Tshen mo nithap cha song
Ningmo lap tu ma long
Ye thang che rong in pey

ペマ：以上３つはチェキで，意味がわからない。

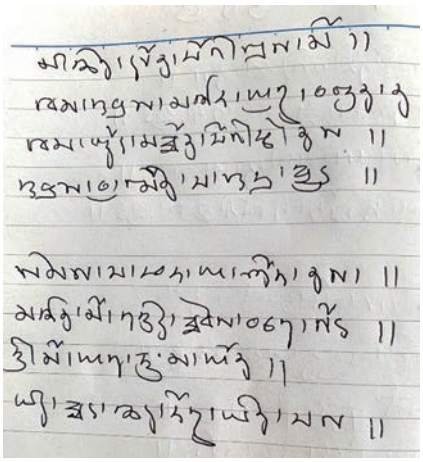
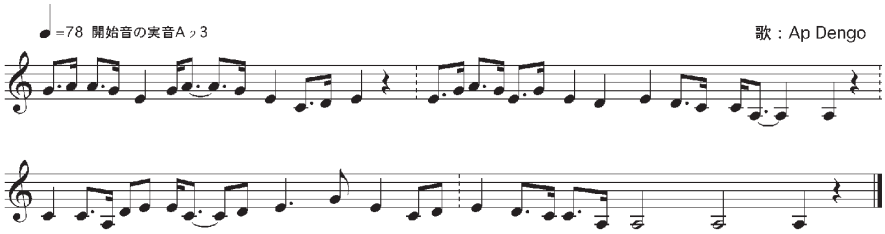
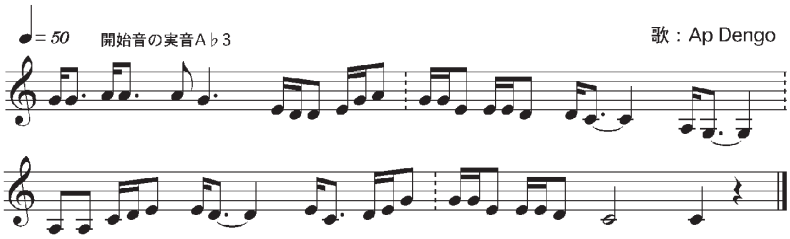


写真21　アプ・デンゴ氏のツァンモ・ノート（伊野 2019）

楽譜A



楽譜B



伊野：そこ（歌詞集）に書かれているのは，自分が気に入ったツァンモと自分で作ったものですか。
D：ダ・ルー（Dra Lue喧嘩の歌），ニェン・ルー（Niyen Lue耳に心地よい歌），チョ・ルー（Cho lue悲哀歌），いいニェン・ルーだけ選んで書いたり，これはダ・ルー，（歌詞を読む）。
ペマ：「一緒に寝てないのに嫉妬しないでください」といった意味。
伊野：いつ書いたのですか
D：トンツァ・シェラップ・ショルデンDungtsho（伝統医療の医者）Sherab Jordenだいだいこの人が書いた歌詞が多いです。ティンプーのHontshoにいます（1959年チベットからブータンに来て高僧Namkhai Nyingpo Rinpocheの医者となった人物。王室の命令を受け，1968年に国立伝統医学研究所の設立を指揮した）。去年RAPA（Royal Academy of Performing Arts）でツァンモのことについて会議があって大僧正様，皆集まってツァンモをやりました。（歌詞集みながら）これは私がつくりました。「歩いて行くときは道の下にある～」（いくつか歌詞を説明する）。
伊野：今ツァンモを歌う人，機会が少なくなって残念ですね。
D：それが本当に寂しい。昔は一緒に集まってツァンモやったりして遊んだけれど，今はテレビでBBS（Bhutan Broadcasting Service）とかで少しやっているだけです。やっている人が少ない。それからタシゴマTashi Gomaという仏塔を背中に担いでいる人が来ると，最初にチュペChupayと言う村のメッセンジャー（交替で担当する）が知らせます。（チュペが）皆を集めて一緒にマニMani（お経）をしたりしたけれど，今は無くなってしまいました。キ・ドKi Doe（Ki シングル，Doeみんな　音頭一同）というトンサの歌で，一人が歌って皆が歌う，そうするのもどんどんなくなっています。

2.9　専門集団の設立

伊野：プンツォ・ダヤンPhunsum Drayangをたちあげました。デンゴ氏が歌や踊りすべてを教えているのですか。
D：RAPAの先生から教えてもらっています。
伊野：どうしてプンツォ・ダヤンを立ち上げましたか。
D：前のグループ（Doegar Punsum1995年立ち上げ）はティンプーで活動していました。最初3人（Dasho Kado, Lopen Tshendru）で一緒に立ち上げました。そのためティンプーにいなければなりませんでした。息子ツェワン・タシからこういうグループをパロに作ってくださいと言われ2006年につくりました。パロにいることができるからです。
伊野：どうして伝統音楽，芸能のグループのプライベートの集団をつくることが必要だったのですか。

D：今まで（自分）は政府で公務員などいろんな仕事してきたけれど，今は年を取ってきてそれができません。これからはブータンの伝統文化が大切になってきます。私も伝統の歌を歌ったり踊ったりして食べてきました。学校で教育を受けた頭のいい人は仕事に就くことができますが，そうでないあまり勉強とかできないけど，歌や踊りに興味を持っている人たちがいます。その人たちのためにプンツァオ・ダヤンをつくりました。そうすれば伝統文化を教えることが出来るだけでなく守ることができます。もう一つはブータンにたくさん観光客が来ているので，皆お寺とか観て，観光の最後にブータンの音楽や仮面舞踊を見てもらうようにすることです。これまで少なくとも 7000 人が喜んで帰りました。喜んで帰ってもらうのも大切なことです。今一つは皆の楽しみのためです。結婚式や家の新築，アーチェリーの試合などで踊ったりすると皆に喜ばれるし，見せるだけでも伝統を守ることができます。自分が昔から歌うのが好きだし，これからできるまで歌っていきたいと思います，できなくなったらしょうがないけど。最後に一つにジュンドラを歌いましょう。

【ジュンドラの演奏】（以下ツェワン・タシによる歌詞の記録と曲を作ったラマの名前）

Thrung thrung zhab dro
オグロヅル（トゥントゥン）の歌

Thrung thrung kar moi lue zhey
白いトゥントゥンの歌
Zhue thri tsaw ley fill yoe
（偉い人の）席の下から
Zhue thri gong gi tshen den
席の上に座っている（偉い）人に
Thrung thrung lue la sen dang
白いトゥントゥンの歌を聞いてください

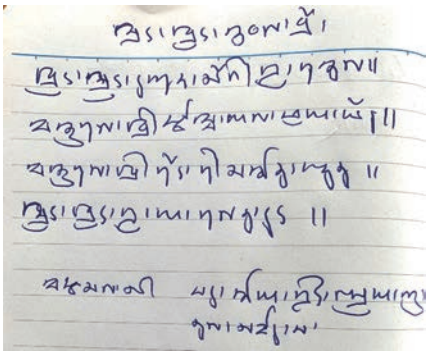


写真 22 ツェワン・タシによる歌詞の記録

tsem mi　Pedseling Trulku
ney ze pa
詞・曲　５世ペッツセリング　トゥルク

D：（日本語で）ありがとうございました。
権藤：歌を聞いたときドレミで聴こえることはありますか。ドレミは習ったけれどドレミで感じることがありません。
D：ありません。

【デンゴ氏作のツァンモ】

Dro lam wo gi om chu	道の下にある水
Kom bi dunyel sel chir	喉が渇いた苦しみを助ける
Lo na zhoen pi tab ki	自分が若かったから
Hopsum thung par nyar song	三回飲みました
Serna chen gi mi di	悪いことしか考えてない人は
Ye da nae su ki yong	餓鬼の世界に生まれます
Nimtshen dunyel nong thi	毎日苦しみがたくさんあって
Thar bi lam du mi key	天国には生まれません
Jikten phar roel zermi	亡くなった後の世界は
Jik shing tra pi yul in	（不詳）

Geydik pang lang yer shir	良いことをして悪いことをやめる
Duk nak chen gi chi yong	（不詳）
Jikten mi yul den due	人間の世界にいるときに
Karpo gey cho drup na	白いいいことをたくさん積んでください
Lendu tharpi lam du	亡くなってから（次の世界に）行くときに
Nyam par thay tshom mo do	天国に行くのは疑いがありません
Chap tshel lhap da lama	五体投地は仏様とお坊様に
Lhaksam nyam dak go ley	心からするならば
Da dam jur mi khe lang	一生忘れないと約束すれば
Tse thuen nueldrup wong	長生きできるようにしてくださいます

3　音楽家アプ・デンゴの誕生

ブータンの伝統的な音楽の世界を語る時，アプ・デンゴ氏は代表的な音楽家としてその名を連ねる。しかしデンゴ氏のことを単に「ブータンの音楽家」として記述することは，正確さを欠くばかりでなく，彼の生きた時代のブータンの音楽文化そのものの捉えまでも危うくしてしまう。

現代的な職業観で言うならば，デンゴ氏は，王族のチャンガブ（奉公人），トゥンイー（事務助手），ブータン王国軍事務員，教育省視学官，盲学校教師，会社役員，音楽舞踊団設立･運営者といった様々な仕事を転々としているように見える。しかも，これらの中に音楽的側面を濃厚に見るのは音楽舞踊団のみであって，他からの推測は一見困難である。では，デンゴ氏の音楽的才能は，人生後半に設立した音楽舞踊団で花開いたのであろうか。もちろんそうではない。彼は与えられた職責を果たしながら，職務の内外において，王族をはじめとするブータン人の日常的な伝統生活の中で，その音楽的才能を発揮してきた。「音楽家アプ･デンゴ」という認識はそうした過程で育ち，近代化の波を経て，現代において確立されてきたと考えることができる。

デンゴ氏は２代，３代，４代，５代国王の時代，すなわちブータンの急速な近代化，現代化の中を王室と深くつながって生きてきた。これは同時に生活の中に溶けこんでいた音楽が，musicとして浮かび上がり認識されてきた時代でもある。したがって，音楽家アプ・デンゴ誕生の背景は，語りの中に表れる音楽以外の要素，すなわち幼少期の伝統的な日常生活，少年期の娯楽やゾンカの読み書きの習得，宮廷奉公人となった青年期，チェキの習得，王子との生活，教育省での教育活動と創作，観光化や伝統文化継承と専門集団の設立等の視点から，その時々における彼の音楽活動を読み解くことによって初めて捉えることができる。

①　幼少期の伝統的な日常生活

アプ・デンゴ氏は，ブータン中央部のトンサ県ツァンカ村に生を受け，幼い頃には，叔父叔母のもとで，一般的なブータン人の生活である羊や牛飼いの日常を過ごしている。放牧の合間にツァンモで掛け合いをして歌ったり遊んだりした。歌は伝統的な生活の中に溶けこんでいた。デンゴ氏の音楽的素養の基礎は，まずここにあると考えられる。

その頃のツァンモの歌詞が現在と同じゾンカであったかどうか（国語としてのゾンカの普及は1970年代）はわからない。しかし，デンゴ氏のツァンモに見られた「白」「五体投地」などは，現在でも頻繁に聴くことができる。我々の調査から一例をあげれば，デンゴ氏作の「下にある水を若い自分は飲んでしまった」といった内容に対応するものとして，次のような歌詞がすでに採取されている。

Lam mey wo gi la om chu	道の下にある湧水
Du chu in ba la ma shey	毒だと知らずに飲んだ
Du na chung pi rang zhi	自分が若いから
Hub su thung pa ki sho	大変なことだとわからなかった

（トンサ県ツァンカ村での2013年の調査から（伊野ほか2014））

さらに，ひとつのツァンモに「白」と「天国」が登場するものとして，サムテガン・セントラルスクール生徒が歌った次のようなものがある。

Choe zhel karsel la dawa	あなたの顔は月のように白くてきれい
Ling zhi korwa la majung	四方にでかけないでください
Yar gi lha ye zhing kham	天上の天国のような平和な所へ
Tey mo ta wa ju gey	お祭りを見に行きましょう

（サムテガン・セントラルスクールでの2015年のツァンモ大会から（伊野ほか2016））

②　少年期の娯楽やゾンカの読み書きの習得

父や叔父が2代国王に仕えていた家系であったことから，ヅァクテンで働くこととなったアプ・デンゴ氏は，村対抗のアーチェリー大会など，社会生活の中での音楽や舞踊を体験していく。ブータンのアーチェリーでは，女性が自軍の応援のために敵を侮辱したり，的を射た者がその喜びを表したりする時に歌い，踊る。そこでは競技と歌と踊りが混然一体となって進行する。また，叔父の秘書からゾンカの読み書きを習ったり，竹笛を自作したり，ダムニャンを独学したりと意欲的な「学び」の時代であったと思われる。こうした，少年期における民俗の歌や踊りの習得，興味関心に基づく楽器製作や演奏の体験が次なる青年期に大きな影響を与えていく。また，ゾンカの読み書きができたことは，後に歌の創作や歌集の出版といった成果につながっていった。

③　宮廷奉公人となった青年期における歌と踊りの披露，チェキの習得

2代国王の命でナムゲル・ウォンチュク王子の奉公人となったアプ・デンゴ氏は，王様家族の前でしばしば踊りを披露する。歌や踊りが堪能であったデンゴ氏を食事の場に呼び寄せるだけでなく，同じ踊りを何度もリクエストしているところから王様家族の「音楽好き」「踊り好き」が伺える。

留学で忙しいナムゲル・ウォンチュク王子の提案で，アプ・デンゴ氏ともう一人のスタッフ，それにアシ・チュキ王女は，ブムタンで高僧ゲルワ・ニワより字の読み書き（綴り）をチェキで勉強した最初の3人となる。この青年期の経験は，その後ナムゲル・ウォンチュク王子の下で事務官として働くという人生の方向性の大きな契機となっている。また，同世代のアシ・チュキ王女と「一緒に学ぶ」ことが提案されるところからも，アプ・デンゴ氏とナムゲル・ウォンチュク王子は，単なる奉公人と王子よりも親近感のある関係であったと推察される。

青年期の王族との親密な関係性，自らの踊りや歌の才能が，アプ・デンゴの音楽家としての基礎をつくっていくことになった。

④　ナムゲル・ウォンチュク王子との生活と歌，踊り

裁判所や軍隊で事務官として働くアプ・デンゴ氏は多忙であったと思われる。そのなかでも何度もナムゲル・ウォンチュク王子に呼ばれ，または昇進パーティーに呼ばれ，歌ったり踊ったりしていたという。ブータン式の宴席での歌や踊り（ジュンドラやヴェードラを歌う，皆でシャプタを踊る，偉い人の前でダムニャンを弾くといった）を披露する中で，デンゴ氏は熟練した音楽家として認知されていった。

なお，この頃，3代国王が王立舞踊団RAPAの前身をつくり，ゴル・ゴムをヴェードラ，ダン・リムをジュンドラとした。ブータンの歌や踊りが再構成され，王立の専門集団が誕生する。

⑤　教育省での教育活動と創作

教育省検視官として働きはじめたアプ・デンゴ氏は，各地で学校建設やゾンカ語指導のチェックといった仕事だけでなく，ヴェードラやジュンドラなどの歌やディグラム・ナムジャを生徒に指導することも職務となる。また，カリン盲学校では，ドレミのソルミゼーションに出会い，これを用いた教育も行った。なお，「ティンティがないとベードラはできるがジュンドラはできない」といった発言に見られるように，ジュンドラ，ヴェードラの様式や演奏法の違いを認識していった。

歌や踊りを披露するという立場に音楽を「教える」ということが加わった。教育者となったことが，その後の歌の創作活動や音楽家活動に発展していく。「ツァンモ・ノート」には，ゾンカやチェキによる歌詞の創作が見られる。こうした読み書きの力が『ブータンの民俗歌』の出版につながる。この歌集は全国の学校に配布され，音楽の専門家としての地位が確立されていく。

⑥　観光化や伝統文化継承と専門集団の設立

デンゴ氏は，民間の音楽舞踊団としてプンツォ・ダヤンを設立する。背景には，伝統文化継承の問題や観光化への対応が存在する。また，近代学校教育の価値観に染まりきらない歌や踊りの好きな若者たちのセー

フティネット的役割も目的としていた。この後，台湾，ワシントン，日本，バングラデシュ，インド等，国際的に活躍の場が広がっていき，音楽家アプ・デンゴとしてその名が確立していった。

年表1　アプ・デンゴ氏年表（聞き取りとバイオグラフィーより作成。黒田2020）

年代	年齢	場所・仕事・活動	宮廷との関係	音楽・文化活動
1937年	0	トンサ県ツァンカ郡ツァンカ村のガプ（ボディガード）の家系に生まれる。父リンジンは2代国王のヴィ（ボディガード）。	1937年アシ・チュキ王女誕生。1943年ナムゲル・ウォンチュク王子誕生。	
1943年～1945年	6～8	ツァンカ村で叔父ペマと叔母ドルジ・ワンモのもと，羊・牛飼いとして働く。	1944年，後の3代国王がトンサ・デニェ親任（15歳）	放し飼いをしながらツァンモをしたり，歌ったり踊ったりした。お祝いの席などでシャプタ，アーチェリーをしていた。
1945年～1952年	8～15	ヅァクテン・ダンパとなった叔父ペンジョールについていき，トンサ南ヅァクテンのナクツァン（王室高官宿泊所）で働く。	1946年，後の3代国王パロ・ペンロップ親任（17歳）。2代国王はデンゴ氏叔父ペンジョールをヅァクテン・ダンパとして任命。1952年3代国王即位（23歳）。	村の人と歌ったり踊ったりしていた。ダムニャンを独学で練習したり，横笛リムや縦笛ジャリをつくったりした。村対村のアーチェリー大会に参加する。ナクツァン滞在中に，ダンパの秘書からゾンカの読み書きを学ぶ。
1952年	15	父リンジンが2代国王奉仕中に死去。2代国王より手紙があり，ナムゲル・ウォンチュク王子のチャンガプ（奉公人）となる。	2代国王の妹王妃よりナムゲル・ウォンチュク王子（10歳）のチャンガプを命じられる。	
1952年～1960年	15～23	ナムゲル・ウォンチュク王子は夏カリンポンへ留学，冬ブムタンに戻ってきたときにペー・チャンガプ（私的ボディガード）を務めた。王子留学中はブムタン宮殿でアシ・チュキ王女に奉公した。	2代国王家族の前で王女のスタッフとともに歌い踊った。	アシ・チュキ王女ともう一人のスタッフと共に僧ゲルワ・ニマよりチェキの読み書き，仏教語を2年間教わる。
1960年～1964年	23～27	パロ・ゾンで昼間はトゥンイー（事務助手），夜はナムゲル・ウォンチュク王子のチャンガプを務めた。	3代国王の命でナムゲル・ウォンチュク王子(17歳)がパロで初の裁判官になる。	ナムゲル・ウォンチュク王子に呼ばれ踊ったり，ダムニャンを弾いて歌ったりした。
1964年～1978年	27～41	ティンプー王立軍Royal Bhutan Army(RBA)で朝はトゥンイーの仕事をし，午後はトレーニングをした。Drimponに昇進しタバにあるブータン王国軍の兵器庫の事務員としてすべての陸軍基地を訪れ武器を検査した。RBAで14年，HRHで13年務めた。	3代国王の命でナムゲル・ウォンチュク王子がパロ・ペンロップ，軍隊RBAチーフとなる（陸軍副代表1964-1968，通商産業森林大臣1968-1971，内務省1985-1991）。1972年4代国王即位（16歳）。	軍隊で昇進祝などの時に踊ったり，ダムニャンを弾いて歌ったりした。Gongloen Lam Dorjiに命じられ，アーチェリーマッチのルールと規則を作成した。
1979年～1995年	42～58	教育省ゾンカ語視学官のほか，チュカのボンゴで食堂建設7か月，ルンツェで校舎再建など頻繁に各地の学校を視察した。カリンの盲学校に転籍し2年間教えた後，サムツェ国立教育研究所に編入した。	1968年3代国王が王立舞踊団RAPAの前身をつくりゴル・ゴムをヴェードラ，ダン・リムをジュンドラとした。	学校でヴェードラやジュンドラ，ディグラム・ナムジャ，文化を教えた。カリンではケサン・ドルジからドレミファを教わった。彼と作曲もした。1987年Tashipai Lu Chi作曲。1991年Deki Phunsum，Gaki Nima作曲。1995年Pelden Drukpa作曲。1989年福岡公演。

1995年	58	ティンプーで音楽グループDoegar Punsum創立。	アシ・ケサン・ワンモ王妃から，ハンセン病キャンペーンのため，20地区すべてでKhandro Drowa Zangmoのドラマを脚本にするよう命じられた。	
1996年～1999年	59～62	ペンデンセメントに入社しナンバー2として働く。3年間。		セメント工場でディグラム・ナムジャを教える。
2002年～2005年	65～68	ティンプーのリンチェン高校のインストラクターとなる。3年1カ月間。		リンチェン高校でディグラム・ナムジャ，文化，伝統舞踊，音楽を教える。
2005年	68	『ブータンの民俗歌』出版，全国の学校に配布。		Doegar Punsumで数か月間講師を務める。
2006年	69	プンツォ・ダヤン創立。	5代国王即位。	
2008年	71	台湾公演。ワシントン公演。		2008年台湾でケンポ・タシ・プンツホッグとラモを連れてケサル・ゲルポイ・ドラマを披露。20日間。 2008年ワシントンでブータンの13の芸術を紹介。
2009年	72	日本公演。バングラデシュ公演。		2009年日本の大阪で伝統舞踊と文化舞踊を披露。10日間。2009年，バングラデシュのダッカで伝統舞踊と文化舞踊を披露。7日間。Alipurで伝統舞踊と文化舞踊を披露。3日間。
2010年	73	インド公演。		2010年タラヤナ主催でデリーにて伝統舞踊と文化舞踊を披露。12日間。
2015年	78			2015年タラヤナ主催でTaktshi College of Language and Cultureにて伝統音楽披露。
2019年	82			

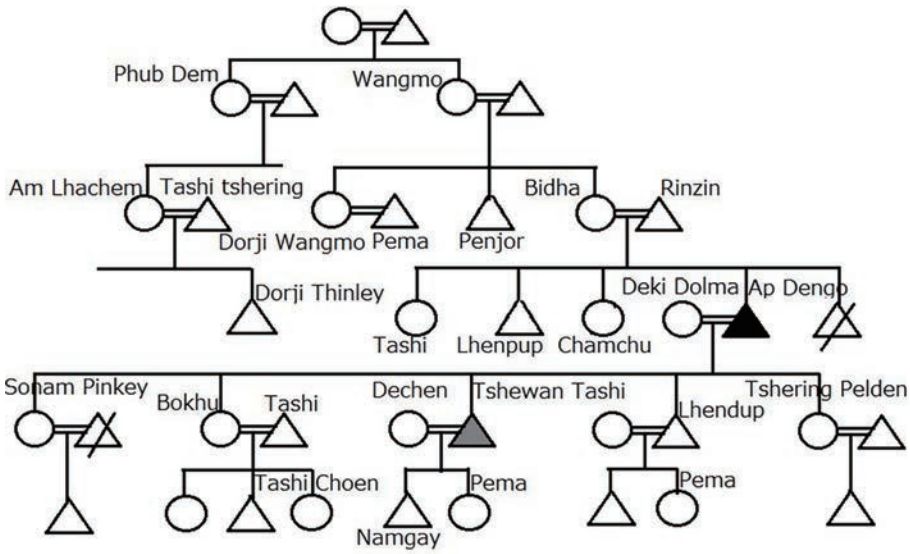


図1　アプ・デンゴ氏を中心とする親族図（黒田作成2020）

【引用・参考文献】

伊野義博, 尾見敦子, 黒田清子, 権藤敦子, 山本幸正, Tshewang Tashi, Pema Wangchuk（2014）「ブータン歌謡ツァンモの実際―トンサ県ツァンカ村とタンシジ村の場合―」『新潟大学教育学部研究紀要』第７巻第１号, pp. 81-99.

伊野義博，黒田清子，加藤富美子，権藤敦子，山本幸正，ツェワン･タシ，ペマ･ウォンチュク（2016）「ブータンの遊び歌ツァンモ―学校教育における継承の取り組み」『新潟大学教育学部研究紀要』第８巻第２号, pp. 167-192.

伊野義博，黒田清子，ペマ・ウォンチュク（2018）「ブータンの民俗音楽覚書～王様の音楽家ツェッテン・ドルジ，ダガナ県の遊び歌ツァンモ，古い歌ダ・ガ・ラ・ミ・ラジュとジャム・シャ・ドレイ～」『新潟大学教育学部研究紀要』第11巻第１号，pp. 69-90.

中尾佐助（2011）『秘境ブータン』岩波書店.

Janet Herman and Kheng Sonam Dorji. 2010. *Masters of Bhutanese Traditional Music Volume One*. Music of Bhutan Research Center.

Lham Dorji. 1998. *WANGCHUCK DYNASTY: 100 Years of Enlightened Monarchy in Bhutan*. The Centre for Bhutan Studies.

Rabsell Media Services. 2008. *100 years of monarchy : A tribute to our beloved kings*. Thimphu : Rabsell.